

暮らしに生かすために

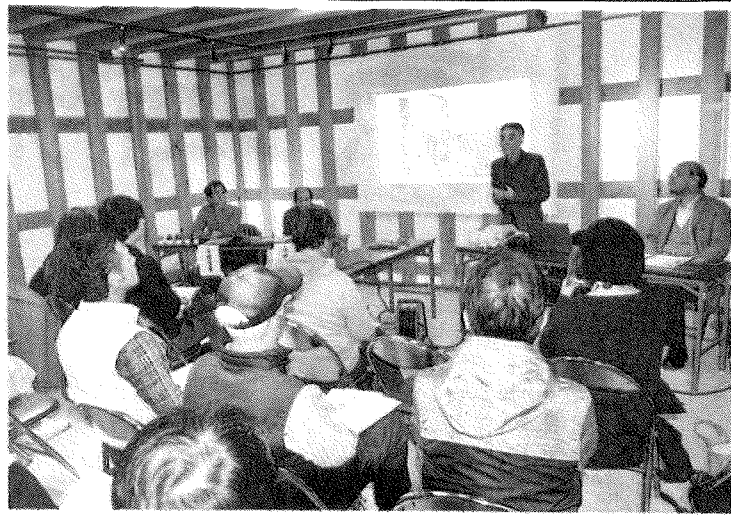
「住田の蔵の相談会」初開催

住田町が主催する「住田の蔵の相談会」は21日、世田米のまぢ家世田米蔵蔵ギヤラリなどで行われた。昭和橋周辺には土蔵が多く現存し、住田を代表する景観として親しまれている中、保存・活用に向けた新たな取り組みにつなげようと、

冒頭、横澤則子企画財政課長は「蔵のある風景は、住田らしさを象徴している。東日本

の蔵には華美な装飾が見られないとし「計算されたモダンイズム。蔵並みのラインが統一されている」と評価。「放っておくと消えてしまうような美しさがある。そういう空間を次の世代に残していくだけで、十分なメッセージがある」とも語った。古い建物を再生しながら活性化を図るまちづくりの方向性や、外国人からの関心が高まっている現状にも言及。「みがけば重要文化財になっていく」とし、地元住民が昔の暮らしぶりや文化を見つめ直すことで、価値や評価が高まっていく流れにもふれた。

町は29日(日)に役場で開かれる町産業まつりで、子どもたちに蔵の材質にふれてもらおうと「土団子つくり」を企画。小林氏と薩田氏、近畿大学建築学部助教の山田宮土理氏がアドバイザーする。



後半のパネルディスカッションでは、まぢ家世田米蔵の蔵改修時に指導にあたった薩田英男氏(建築家、有隣田建築スタジオ代表)がコーディネーターを務めた。パネリストと多彩な視点から蔵文化の素晴らしさを発信した「相談会①」、終了後には「蔵めぐり」も。船首のような角部分の意匠も見学し世田米

して藤田氏と小林隆男氏(左官、江州左官土舟代表)、小林澄夫氏(雑誌「左官教室」元編集長)が発言し、幅広い視点から蔵文化の奥深さを伝えた。

小林澄夫氏は、世田米では「ナマコ壁」の角部分が、船首のように高く持ち上げられた意匠が多く見られ、全国的にはない特徴と説明。終了後は商店街沿いを歩いての「蔵めぐり」も行われ、参加者は一つ一つ工夫が凝らされた造りをじっくりと見学した。

また、まぢ家世田米駅にある蔵の1棟で傷みが進んでいることから、今月から安全対策に着手する方針。町はこうした取り組みを広く示し、蔵を再活用する動きにつなげる。